烽火
No. 19
(関西)共産主義者同盟政治機関紙
編集発行人・永井武夫
連絡先・京都市上京区烏丸今出川　同志社大構内　京都府学連気付

万国のプロレタリアート団結せよ！
戦闘的労働者・学生は共産主義者同盟に結集せよ！

11,6ロシア革命記念集会に結集せよ！

—同盟政治局アピール—

戦斗的 反改憲斗争の組織へ

革命的労働者諸君、学生諸君！

ロシヤの広大な土地に、地球上最初のプロレタリヤ革命の赤いかがり火が火の手をあげてから四十六年が過ぎ去った。

フランス革命が近代ブルジョア社会の偉大なあけぼのであったのに比し、ロシヤ革命は数千年、いや数十万年の人類史上、最も特筆すべき出来事であったかに見えた。

それ以前の人類史上のいくつかの出来事が、人類をただ旧い緊縛から新しい緊縛へ、不合理な階級支配から合理性を帯びた階級支配へ、未発達の束縛から発達した束縛へと導いたのみであり、常に新しい、より大きな悲惨を人類にもたらしてきたのに対して、ロシヤ革命は発達した未解放から発達した解放へとロシヤの人民のみならず全人類を導くかと思われた。

だが、革命劇の第一幕から第二幕への幕間は以外に長かった。

誰しもが否定することの出来ない四十六年間が、抑圧されている人々にとっては、余りにも長い四十六年間が既に過ぎ去っている。

ヨーロッパのあらゆる先進資本主義国のプロレタリアートが、アメリカのプロレタリアートが、そして日本のプロレタリアートが、自己の歴史の最後に刻みこまねばならなかった文字が「挫折」の二字であったことを、一体誰が否定できるだろうか。

「歴史的必然」—その一語で片付けられるには四十六年間の歴史は余りにも長く、余りにも豊富であり、そして余りにも悲惨であった。

幾度かの革命的高揚、そして運動の退潮、その額に「歴史的必然」の五文字を刻すには余りにも苛酷な歴史がそこにある。

十月革命において示された、すぐれた国際主義は色あせ、国際的連帯をただソ連に対する、あるいは中共に対する従属としてしか表現することができないという事実が、それにとって代っている。

一九一七年、ロシヤにおけるプロレタリア国家の成立とその存続は、確かにその後の世界史に巨大な影響を与えている。

中国革命の成功、東欧人民民主主義諸国の成立、それらの諸事実がソビエトロシヤの存在をぬきにしては決して語り得ないということは争い得ぬ事実である。

だが同時に、スターリン以来の一国社会主義理論が、ヨーロッパにおける幾度かの革命的高揚をおしつぶし去ったのも事実であり、ポズナン暴動、ハンガリー事件に見られる如くソ連＝スターリン官僚の大国主義がいわゆる社会主義諸国圏の内部においてすら、暴力に基いた国家間の支配、被支配の関係を生み出しているのも文厳然たる事実である。

過去四十六年間の歴史の中に、我々は、革命に成功したプロレタリア諸国家においてもブルジョアイデオロギーの影響が不断にあらわれ、あるいは誤謬と堕落が長期に亘って、指導者をも、人民をも支配することがあり得るという悲しむべき事実を見なければならなかった。

労働者諸君・学生諸君!!幾次かに亘るプロレタリア革命の挫折の上に築かれた、矛盾に満ちた世界は、その内に未曾有に発達した生産力をふくみ、その生産力と固有の生産諸関係との矛盾を不断にプロレタリアートに対する苛酷な搾取と抑圧に転化しつつ自己の延命を図ろうとしている。

EECの強大な発展によってもたらされた世界資本主義の新たな段階—世界市場の再編期は同時に各国ブルジョアジーのプロレタリア人民に対する支配様式の再編期であり、世界的な政治反動を前面におし出している。アメリカの失業問題・黒人問題の激化、イギリスの失業反対斗争、フランスの農業問題、今春の炭鉱労働者の激しい斗争、そして、イタリア総選挙に見られた共産党の大躍進出と左右への分極現象、こうした国際的な動向は、既に全世界的に開始された経済的・政治的抑圧に対するプロレタリアートの反抗の端緒的な形態にほかならない。

こうした斗争が、端緒的な形態のままに終るのか、それとも国際プロレタリアートの強大な力が結集されて資本主義の延命の道を絶ち切るのか、人類史の一切がそこにかけられている。

にも拘らず、欧米諸国のプロレタリアートとその指導者の間に深く浸透している「現代資本主義変貌論」は依然として斗いが根源的なものに向ってつきすすむのを阻害している。「世界史の新たな段階を画した」などともてはやされている核停協定は発達した生産力と生産関係の矛盾の最も端的な現象である核兵器の生産を、あたかも、本質的な問題であるかの如くとらえることによって、問題の所在をぼやかす役割しか果していない。

労働者諸君・学生諸君！こうした世界的な規模での政治反動と軌を一にして、日本における政治反動も着々と進められている。安保斗争以後〝低姿勢〟と称された池田内閣の政策は、しかし決してプロレタリアートに対する宥和政策ではなかった。

この間に安保斗争に見られた両階級の力の均衡状況がブルジョアジーのヘゲモニーの下で徐々にうちくずされていったことは誰しもが感じていることである。また激しい合理化政策と労務管理の下で、労働者階級は、明日の仕事の為の最少限の自己の体力の再生産に一切の残余の時間を費さねばならない状態に追いつめられており、労働組合は資本主義の敵手たる地位を捨てて、第二労務管理部になり下っていることを諸君らは、自分自身の日々の体験を通じて誰よりもよく知っているであろう。

この三年間、経済的関係を通じて強化されてきた労働者人民に対する抑圧政策は、七十年再度の安保改訂に向けて再び正面きった政治反動への変化を示し始めている。

そして、日本の政治反動を集約せんとするものは、いうまでもなく憲法改悪である。ブルジョアジーの改憲への準備が、憲法調査会を中心にしながら、着々と進められているのに比し、反対勢力の結集は全くなされていないといってもよい。社会党は選挙の為にのみ反改憲集会を開き、三分の一の議席に憲法問題の一切を矮少化しており共産党は十万党員を総動員して三名の代議士をふやすことに浮身をやっしている。憲法調査会の激しい論議は唯、いかにして人民を欺くか、という問題についての意見の対立に他ならない。

革命的労働者諸君！

現代世界の危機は何よりも世界的な規模での運動主体の危機にある。憲法斗争にむけて準備を開始せよ。その過程で、社会党の社民としての本質を暴露せよ！ブルジョア議会で議員になってみたいやつに一体何が出来るのか。斗いの中で日共のアナクロ民族路線をふっとばせ。数百の労働者の戦斗的斗争はやがて数万の大衆運動に全世界を覆う労働者の声に広がっていくであろう。

戦斗的労働者諸君!!大手前会館に結集せよ！

11・6ロシア革命記念
労働者集会
場所・大手前会館　六時より
主催・労働者協会
後援・(関西)共産主義者同盟

—テーマ—
○レーニン・トロッキーの現代的意義　同盟議長　飛鳥浩次郎
○憲法改悪と労働者階級　同盟政治局　佐伯武
○中ソ論争と十日革命　同盟政治局　園田浩

京都 府学連に弾圧の嵐

去る四日、京大西部構内が府警機動隊と私服計一〇〇名に包囲された。次いで八日未明、同大此春寮が同様の事態にさらされた。

九月三十日の市電・市バス値上げ反対斗争で府学連が市会にすわりこんだのに対し、市長の告訴に始まる府警の捜査ぶりには異様なものがある。すでに値上げ反対斗争が社会党議員団の寐切れでの裏切り（反対の大衆行動を呼びかけておりながら、市会最終日になって突然賛成に回ったこと）によって終息し、しかも各大学が試験期に直面している現在、府警の攻撃ぶりは明らかに府学連の組織的破壊をねらっている。

全員逮捕方式と大学へ機動隊を動員しての恫喝は、学生大衆が試験で政治的意志統一の場が持てない時点で、極めて有効に左翼を孤立させ、中間部分を権力の論理に屈服させるのに役立っている。ジャーナリズムの連日の報道は一層この方向を促進している。

府学連は指導部の大半が追いかけられるという困難ななかでようやく斗う体制を確立し、十月十一日の抗議集会を契機に十七日の大衆行動に向けての取りくみが精力的になされている。

安保以後の大衆運動の停滞のなかで学生運動も後退を強いられ、権力の集中砲火をあびるなかで東京の学生運動は圧殺された。政暴法斗争、憲法斗争において大衆的政治斗争に成功した京都府学連は当然、低姿勢を名のる池田政府にとって目の仇であり、福岡県警から、三池斗争の弾圧を指導した服部警備部長をして就任させると共に、府学連破壊は現在まで極めて系統的にとりくまれて来た。

市会すわり込みを契機にした今回の弾圧はこれまでの過程の総決算であり、マスコミを動員しつつきわめて巧みな戦術がとられ、捜査のはんいは極めて拡大している。

日本資本主義の高度成長に支えられた池田の低姿勢がかもし出す泰平ムードはいよいよ破られようとしている。株価の動向や、朝日の世論調査に見られる物価問題での不満は、今回の総選挙において池田派を不利にさせる要因となっている。そしてこの総選挙は基本的には池田派を基調にしながらも右派が擡頭していく場となるであろうし、このことは憲法に集約される治安体制の改変のテンポを早めるものとなるであろう。

池田内閣はこれまで低姿勢をよそおいつつ大衆運動の低滞をたくみに利用し、公安条令の拡大解釈のごとき、極めて行政的な方向での治安体制の整備をして来た。

したがってこのような時点での大衆斗争の展開は極めて重要であり、大衆行動によって弾圧をはね返してゆくなかで池田政府のばくろも可能なのだ。

しかも現在、行政的措置から立法的措置への移行が憲法改訂というかたちで準備されており、行政的措置を大衆的行動で粉砕してゆくことは非常に有効な斗いである。

我々はこの弾圧のなかからこのような教訓をくみあげると共に、その打破の方向も憲法改訂までを見通した上での弾圧の意味とそれとうらはらの関係にある大衆行動の意義を大衆に訴えつつ大衆行動でもって弾圧に答えねばならない。

9.22関西地方総会と社学同の任務

—学対部—

去る九月二十二日、社会主義学生同盟の関西地方同盟員総会が京都で開かれた。試験シーズンに入ったとは云え、京都、大阪、名古屋、和歌山、岡山、四国の各支部の代表約五十名が結集し、討論がくりひろげられた。

この総会は、安保以来久方振りに準備されたものであり、これまでの各支部の地方的、独立的活動の間に勝ちとられた成果の確認の上に今後のより組織的な活動方向が決定された。

総会は、困難な情勢にもかかわらず十・三十一ゼネストを断固として成功させることを意志統一し、その斗いのなかで社学同の全国化のための活動にとりくむことを確認した。

確認された主体の深刻な危機

総会は、まず学生運動の大衆的展開が極めて困難な状況に追いこめられていることを確認せねばならなかった。

安保斗争の混乱を収拾すべく登場した池田内閣は、日本経済の高成長に助けられ、ジワジワと力関係の逆転をねらった。一方、既成指導部は安保斗争の敗北を総括出来ないばかりか、その後のブルジョアジーの攻撃にも何ら有効に対応できず、労働者大衆を無指導のまま放置したのであった。

総評民同は、三池斗争の敗北を契機に急速に資本への屈服を開始した。彼らは、イタリア生まれの構造改革理論を吸収し、労働者に福祉国家の幻想をまき散らした。

このような事態の進行のなかで、労働組合は、資本の労務管理の一端を担うものに変質しつつある。労働組合が政治斗争を展開した従来のいわゆる日本的政治斗争の面影は失なわれつつある。

学生運動は現在までこの総評が展開する市民的政治斗争の一翼を担っており、この市民的統一戦線の発展の過程で自らも発展した。そして、学生運動の論理は、他階層との共同斗争を抜きにしては語れないのであった。

現在の学生運動の危機が単に、その指導部の分裂や無能力によるものではなく、もっと深いところにこそ、即ち、統一して斗うべき斗争部隊が斗わなくなったところにその真の原因があるのだ。

（次頁へ続く）

―主張―
奇妙な中ソ派はなぜ生れたか
―中ソ論争と日本共産党―
飛鳥浩次郎

日共の公式見解

久しぶりに病気回復した日本共産党の宮本書記長は、中ソ論争に対して日共は中立の立場をとることをテレビ放送で表明した。野坂議長も又、大阪の記者会見で同様の趣旨をのべた。ところが中共は北鮮との共同声明で自己の正当性を強く主張し、ソ連は国慶節にあたって「中ソ論争において中立はあり得ない」というパラグァイ共産党の主張を機関紙に掲載した。一体全体、中ソ論争は各国の共産党、なかんずく日本共産党にとってどの様な意味があるのだろうか。それは何か日共に重大な変化をもたらしつつあるのだろうか―例えば従来の「コミンテルンに従属した日共」という非難に応えうるような……。

我々が最近の中ソ論争と日共の関係から後の如き問題意識をもつことは、第一にそれが世界革命との指導性をめぐる論争であること、第二にそれが従来世界革命をめぐって誤まれる指導をしつづけたスターリン主義に対する評価を中心とした論争である以上当然である。

ぬきがたい一国社会主義の弊害

しかし、中ソ論争は我々が幾度か指摘してきたように「一国社会主義」というスターリンの理論を共通の基盤とし、その延長上で展開されている。この一国社会主義理論は、現代史における特筆すべき特徴―すなわち、各国革命運動のソ連政策に対する従属―を先ずスペイン革命運動史の中に深く彫み込んだ。その後もソ連における一国社会主義の建設（プロレタリア国際主義の放棄）は中近東において、アルジェリアにおいて、或はポーランド、ハンガリーにおいて常にその国におけるプロレタリア革命の真の達成を阻害しつづけてきたのである。

そして現在、中共も又一国社会主義の建設に向けて歩を進め、まさしくその観点から各国の革命運動に対する支配権をソ連と争うに至っている。従って、日本共産党がとりうる態度は唯一つ、かかる一国社会主義理論、今日においては「一国共産主義の建設」とまで呼ばれている欺瞞に満ちた理論に対する徹底的批判を通じてのみ形成されるであろう。今日、一国社会主義理論は平和共存政策の固定化、社会主義への移行形態の多様性の絶体化、それによる世界革命思想の放棄、ひいては日和見的現代資本主義論にもとずいた、漸次的移行の理論に途を開いている。そして表面的にはこの平和共存路線の反革命性の批判者としての姿をとっている中共にしても、現実政策としての一国社会主義論の故に、その主張する世界革命を、せいぜい後進国解放革命方式、極言すれば中国革命方式のおしつけのうちにしか見ることができない。

日共指導層の形成過程

では、わが日共はどうか。中ソ論争に対して中立とは一体何を意味するのか。それは言葉を代えれば、わからないという一致点を代弁するにすぎない。コミンテルン（スターリニズム）に対する信仰、中国革命方式に対する信仰、いうなればこの信仰に加えられた打撃、そこからでてくるのは今日の日共の受難者としての姿である。

だが、この受難の意味するところは大きい。日本の革命運動を通じて、多くの革命的労働者を自己の下に結集しながら、誤れる指導の下に革命運動を毒しつづけてきた日共は、今日も依然として革命運動に大きな影響力をもちつづけている。そして戦後もコミンフォルムの批判で打撃をうけ、中国方式の模倣で火焔ビン斗争を指導した日共は、今日、奇妙にも六全協と民々路線を自己の中心路線としている。六全協は恰もフルシチョフがスターリンを批判した如く、宮本、野坂、志賀、袴田等が徳田球一の家父長制を批判した。そして平和共存路線に見合う如き、統一と団結の方式、社共統一方式をうちだした。

にも拘らず、五一年綱領の担い手たる指導部の居すわりは中国革命方式を自己の革命原理として無批判のまま温存せしめた。民々路線といわれるものがそれである。そのため実践的、行動的には、現実の大衆社会にみあった市民共斗方式、統一と団結方式、いわば右翼日和見主義の立場にたちそれを民々路線で裏づけながら、思想的、組織的には、中国方式、いわば後進地域の解放の現在的課題―反アメリカ帝国主義の採用となったのである。

これは指導部の真の革命的自己批判の伴わない方針転換の必然の帰結であろう。

それ故に日共内においては一九五五年以降、恰も今日の中ソ論争内において展開されているような、スターリン批判をめぐる責任をめぐった論争が展開され、左にトロツキスト、右に構造改革派、そして主流に中共派を生みだしてきた。

奇妙な中ソ派＝中共派

今日の日共を見る限り、その表面的な中立にも拘らず、そして党内大衆の"わからない"という一致点にも拘らず、その指導部はあきらかに、中共の路線と歩調をあわせている。

それはまさに五六年以降の日共指導部内の反スタ斗争において勝利をおさめたものが、五一年綱領の責任者であり、その勝利が居なおりであったことの当然の帰結である。

だが理論的な、政策的な路線では、例えば部分核停ひとつを見ても中共派でありながら、実践的にはいやおうなしに国家独占資本主義社会の中にあって、合法的な大衆政党たらんがために、かたくなに体制内的「安保国民共斗方式」＝「市民的統一戦線方式」に、いうなれば平和共存方式に依拠するということは一体何を意味するのか。

それは何よりも日共指導部の言動に表言されよう。即ち彼らは当初は、中ソ論争の存在を否定し、これをブル新のデマゴギーに帰せていた。

だがいまやそれが隠しおおせなくなるならば、中ソに対する信仰を捨てるに忍びず、両方を支持する挙に出たのである。

いうなれば日共は中ソ派である。何故ならば、平和共存のムードは資本主義社会にあって天下泰平ムードとなり、大衆のムードでありこれに対し、露骨な否定はできない。即ち、自派（中共路線）が強くなるまではがまんせよである。だが、中共路線、即ち五一年綱領は、自己自身である。まさにこれをたてにとって党内の反スタ斗争を粉砕してきたのである。この路線を放棄してなおかつ党内外の大衆をあざむくことは不可能である。かくて中共派＝中ソ派ができ上ったのである。

欺瞞の継続は可能か

だが今日の中ソ論争が国際共産主義運動の危機＝スターリニズムの危機として展開されている時、この日共の皮算用がどれだけ有効であろうか、それが有効であるためには少くとも次の如き条件が必要であろう。

まず、今日の天下泰平が依然として続くこと。

次に中ソ両国が、その日共の指導部の苦悩を理解してくれ、中立が誤りだなどといいださないこと

そして労働者大衆、及び日共内の大衆がこの日共にだまされつづけることである。

しかし、一度目を現実にもどすならば、我々はこの日共指導部の今日の判断は絶対に"甘い"ことを指摘せざるを得ない。

それは何よりも先ず日共党員の増加、或は民青同盟員の増加といった現実が、今日の社会的矛盾の蓄積から起っていることを無視できぬということである。

それは世界的にもアメリカの黒人問題、失業問題、イギリスにおいても農業問題、失業問題として具体化しており、フランスの最近のストライキ、イタリーの左右への分裂の極限化にもみられる。

日本においても今日の憲法危機次期安保改訂は、日本資本主義の市場問題にあらわれている矛盾を基盤とした底深い振動を伝えつつあるのだ。

更にEECをめぐるブルジョアジーの全世界的な延命への苦悩は中ソの一国社会主義、更には東欧諸国、北鮮などの一国社会主義の矛盾を更にはげしく露呈せしめるだろう。

又労働者大衆にしても、日共の中ソ派、実は中共派、社会党の奇妙なソ連派などという俗っぽい興味にいつまでもとらわれてはいない。

労働者階級をとりまく今日の状態の中で、何が問題なのか、斗いの方向は何なのか、ここにこそ、問題の中心があること、そこに照してこそ、欺瞞的な日共の指導がうちくだかれ、又そうしない限り、安保斗争をのりこえることは出来ないのだという歴史的意味をよみとるであろう。

最後に付言するならば、我々は今日の恰も中共＝左派といったムードに便乗した如き日共の左翼化現象が、日共派のスターリン批判＝六全協以降の党主流の指導体制を維持せんがためのセクト主義の表現に過ぎぬことをつけ加えておこう。

この奇妙な中ソ派に照応した、自己批判ぬきの辻つま合せ、ここに我々は官僚主義者のすさまじいまでの地位への固執を見ないわけにはいかないのである。

欠落する対決の姿勢
―ナンセンスな関西平和集会―

去る9月30日、大阪扇町プールで"関西平和大会"が開催され、一万数千の労働者が結集した。

この大会は、8月原水禁大会における珍妙な分裂のあと始末として、社会党が、その正当なる市民権を労働者階級の中に確保しておくという代々木以上のセクト主義を根拠として開かれた。

しかし、この大会は労働者にとって別の意味をもっていた。

池田内閣の低姿勢のうらに進行する労働者階級への搾取と収奪の強化（春斗のカベ、合理化にともなう労働強化、職場支配体制の確立、物価値上げ……）の中で、自らの斗争を貫徹出来ずにいる労働者階級が、やっと提供された行動の場として、この大会を設定し、資本家階級に対する「不満」を表明した。明らかに、この大会は、かかる搾取と収奪の結果が、日本帝国主義の野望を実現する政治反動＝核潜の導入、日韓会談、ILO、そして憲法改悪に集約される＝の姿勢を、低姿勢のスキ間にかいまみられることに対する、労働者の抗議の意志表示であった。

そうした労働者階級の自然発生的なこの社会に対する不信の気運は、昨年来、労働運動の圧倒的な右傾化の中で、完全に圧殺され、かすかに、民青の催す街頭カンパニヤにはけ口が見出されていたのである。今度の大会は完全に組合動員に依拠することによって、こうした労働者の気運が、その「気運」のままで集会に組織されていたのである。

社会党、統社同、その他の有名人は、かかる労働者の気運に対し勝手に、平和、軍縮などの美名をはりめぐらし、そのエネルギーをますます幻想化させ、小ブル化させようとしたのである。

先述の労働者に行動を促す諸要因が、一体、いかなる階級的内容を保持し、いかなる準備が労働者に必要なのかを徹底的に討議することなく（そして討議するためには、現実に職場と生活にかかっている資本の攻撃をはねかえす非妥協的な斗いが前提になる）、斗いもしない、労働者の存在とは無縁になりつつある組合の動員指令だけで、こういった集会を続ける限り、労働者の社会に対する「不信」の気運は、逆転し、大勢順応と組織に対する「不信」が醸成されるだけとなろう。

関西平和大会に参集した労働者自身が、集会前座にかかげられたスローガンや、演壇から発せられる「空々しい」言葉に対し、いかに無関心を表明していたかは、集会の中に参加した者ならだれでも感知出来ることであった。

我々に与えられている任務は、こうした労働者の動向が、単なる「不満」に終始せられることなく、この自然発生的な斗いの姿勢を意識的な運動に転化していく為に、職場での活動を強化し、その中核組織をつくりあげるために努力しなければならない。

それにしても、珍妙なのは統一社会主義同盟である。彼等は、この集会の縁の下の力持ちを果したことを「ほこりに思い」その代償として、議長団にずらりと顔をならべさせてもらった。彼等は見事に社会党の裏切り（美辞麗句で労働者をたぶらかせる）の実行者となりながら、政治舞台に登場したと錯覚している。

このやり方は、組合幹部に"政策"を教え、職場での労働者の組織化をネグレクトするという一昔前の構改のやり方そっくりである。

彼等は二年間、一体何をやってきたのか?

（前面より）

危険な"安定"に鋭い切込みを

既成指導部の無能力がこのような労働運動の資本への屈服を助長するとしても、その根底的な要因は日本資本主義の高成長による「安定」に求めなければならないであろう。日本資本主義のこの見かけ上の「安定」が労働者階級の自然発生的斗争を窒息せしめる主要な原因である。

しかるに総会は、この「安定」が一時のものに過ぎないこと、さらにこの「安定」が崩壊する時点でブルジョアジーは、「治安維持法」以来の伝統的な暴力的支配の道を選ばざるを得ないことを明らかにした。

「安定」ムードは高成長の行きずまりによってその幻想が破られるであろう。西欧諸国の成長が行きずまり、階級斗争が激化しつつあることと、さらに日本の産業構造の跛行性の一層の進行は高成長の一時性を明確に予言している。そして、このままでは改憲反対斗争は権力の一撃によって粉砕されることは明らかであろう。さらに社会党右派は構造改革理論を吸収し、ブルジョアジーの第五列になりつつある。この点をふまえるならば、来たるべき激動期の労働者階級の斗争は、再び自然発生的なままにまかされ、さらに自然発生的な昂揚すら圧殺される過程をたどるであろう。

意識性・組織性の確立に向けて

このような分析の上にたって、総会は、今後の活動が極めて目的意識的性格を持たねばならないことを確認した。

これまでの関西社学同の活動は、学生運動の大衆的展開を持続するなかで「安保全学連」に結集していた新左翼の再結集をはかることに集約された。だが、これまでの活動のなかでもっと大きな、深い問題が提起されねばならなかった。

関西社学同の立脚点は当時の主体的力量から、自らを綱領的な立場で結集せずに、情勢分析に於ける科学性を学生大衆運動によって検証しその正当さを唯一の結集点としたのであった。この立場は一般的に云えばきわめて中間的ではあるが、しかしながら、綱領的認識を未だ持つに至っていない段階での組織戦術としてはこの方法は最も優れていた。

だが、総会はこれまでの、このような活動が、現時点において、さらに発展させられねばならないという結論に達した。その方向は労働者階級への理解を増すことであり、結論的には、来たるべき激動期の性格を明らかにし、活動方向を決定することといえよう。

けれども、現段階においてはその解答が全面的に与えられていないことは事実であり、これまで通りの運動をつづけながら、さらにこの問題をも消化出来るような組織体制を組むことが提起されねばならなかった。それはこれまでの「独立」社学同を強固に組織すべき機関紙「戦士」の発刊によって与えられた。

すでにそのための活動は、京大、同大をはじめその他の支部でもとりくまれはじめた。その成果は、十・三一斗争以後に開催されるであろう全自代において花開くであろう。

（前号二面より）

由化と共に訪れたことは教訓的である。こうした状況に即応して、ブルジョアジー自身が、「革命的な」国際通貨体制の問題を呈出し、EEC自体が、その新たな対応だとするならば、要求されているものは決して「平和的移行が可能だ」とか、「議会の再評価であるとか」ではなくて、すぐれた国際的ビジョンを形成することであろう。

そして、国際性とは階級のヘゲモニー以外にはありえないし、階級的ヘゲモニーが、まさしく、権力の問題であるとするならば、もはや結論は明白であろう。

大衆に疎外された中ソ論争

中ソ論争が、あくまで「中国」と「ソ連」の論争であって、名実ともに「国際共産主義運動の総路線」ではない限り、資本主義国の労働者階級（それこそが、国際革命の鍵を握る）にとっては、焦点のずれた論争であり、それに興味を示すよりは、もっと重大なことがある場合、（階級斗争が深化していればいるほど）大衆は、それから遠ざかるであろう。彼らは、「ソ連派」「中国派」として、この大衆に「興味を示せ」と号令するイデオローグよりは、余程健全であろう。

その意味では、第三の立場をとっている三浦つとむも、他の人々に匹敵する一流の左翼文化人のようである。「矛盾論」なる、架空の論理で割り切り、その整序性によろこぶなどと言うのは、知的遊戯以外のなんでもない。この三浦つとむの論稿の示すものが、安保以後こうした非共産党「マルクス主義者」が次第に大衆から遊ざかり、自分のとりまきとの思想交流しかやらず、悲劇から喜劇の主人公になりつつある姿として、もって他山の石とすべきであろう。

「前進」によれば、革共同全国委員会は、中ソそれぞれ、一国社会主義論＝スターリニズムであって、この点を再検討されない限り、論争はデッドロックであると述べていることは、勿論正しいとして、しかし、「中国が現在、左翼的大衆に幻想を与えているにかんがみ、そのスターリニストとしての本質をバクロし、そのマルクス主義の歪曲をバクロする」と述べる時にも、我々は同様のことを感じる。彼らは、中国の「原則主義」にまた「原則」を対置するようである。

必要なのは、現代の危機の性格その中に含まれる国際性（危機の同時性）を立証し、その観点から、中ソの役割を客観的素材として定式化することである。（M）